

---

# ドラゴンクエスト? ～天空の花嫁～

アメツチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドラゴンクエスト？ ～天空の花嫁～

### 【Nコード】

N7449X

### 【作者名】

アメツチ

### 【あらすじ】

愛する者を救うため 父、子、そして孫の三代に渡って受け継がれる強き意志の物語。 天空に導かれた者たちの冒険が今、始まる。同名タイトルの名作RPGをたどる二次創作です。 他サイトで公開中の作品を転載。 オリジナル要素控えめ、原作に沿ったストーリー展開にしています。

## 1・誕生

松明が静かに燃えている。

豪奢で毛先の深い絨毯を踏みしめる感覚がいつもと違う。

「さあ陛下。こちらでございます」

「うむ。本当に苦勞をかけたな。礼を言うぞ」

実直で、かつ強靱な意志を感じさせる瞳を柔らかくに細めながら、深紅のマントに身を包んだ男は給仕の女を労った。上品な微笑みを浮かべた初老の女は、そのまましとやかに腰を折り、男を先導して歩き出す。

本当は駆け出したかった。一分一秒でも早く愛する者の元へと向かいたい。

だが男は逸る気持ちをぐっと抑えた。大柄な自分が走ればそれだけ音と振動をまき散らす。それが『彼女』には良くないのだと口酸っぱく言われていたからだ。

給仕の女に付きゆつくりと歩く。その姿は王者の威厳すら漂う。

否。男は真正正銘の王だった。名をパパスという。

深き森、険しき山に囲まれた天然の要塞、堅牢にして優美さをも兼ね備えた古城グランバニア。その頂点に立つ男である。

はるか遠国にまでその勇名が響き渡るほどの猛者が、これほどまでに気もそぞろになる理由。それは

「こちらです。中ではお静かに。マーサ様もご子息様もようやく落ち着いたところでございますゆえ」

「う、うむ……」

そう。パパスとその妻マーサに、待望の男子が誕生したのだ。

一国の王から一人の父親へ。魔物相手にも決してひるまないパパスだったが、今日ばかりはいつもどおりとはいかなかった。『自分

に子ができた』という初めての経験の前には、持ち前の冷静さなど蠟燭の火のように吹き飛んでしまっていた。

精緻な意匠の施された扉をゆっくりと開ける。かすかな熱と、そして溢れんばかりの聖なる気をパパスは感じた。

中央の寝台に横たわる妻が、気配を感じて振り返る。

「あなた……」

「マーサ……！ よく、よくやってくれた」

つい小走りに駆け寄る。厳格な顔にわずかな赤みを浮かべたパパスを見て、マーサが柔らかく微笑んだ。疲れの余りか若干やつれていたが、その表情は常日頃目にする以上に美しく、神々しさすらあった。

パパスの視線が、彼女の隣で毛布にくるまれた赤子へと行く。

「ほら。私たちの子よ。今は眠っているけど、とても元気な声を上げていたわ……」

「おお、おお！ 下の階にも聞こえてきたぞ。そうか、男か！ 元氣そうだ！ うむ、目元はお前にそっくりだ！」

自分でも訳の分からないことを喋る。その様子に乳母がくすりと笑った。

マーサが声をかける。

「ねえあなた……。この子に名前を付けてあげないと」

「うん？ おお、そうだな。何がいいか」

パパスはしばらく寝台の回りを歩いた。顎に手をあて、これまでにいくつも考えた候補の中から選んでいく。この感動を表現し、自分と愛する妻の宝となるに相応しい名を。

しばらくの沈思黙考の後、パパスはマーサに向き直った。彼には珍しい、満面の笑みを浮かべて言う。

「よし。トンヌラというのはどうだろうか」

「まあ、素敵な名前……賢そうで、優しそうで」

「だろっ？」

「ええ。……ねえ、あなた。私もこの子の名前を考えてみたの」

遠慮がちな妻の申し出に、パパスは無言で先を促した。

「アラン……というのは、どうかしら？」

「アラン、か。いまいちぱつとしないが……お前が考えたのなら、そうしよう」

妻に笑いかける。ばさり、と深紅のマントを翻し、パパスは赤子とそつと抱え上げた。

「アラン。今日からお前はアランだ！」

「まあ、あなただったら……ごほっ、ごほっ！」

「マーサ？ どうした、すっかりしろ。マーサ！」

声は次第に遠くなる。

潮騒の音が、どこからか聞こえてきた。ぞぞん、ぞぞん……と。

## 2・船上の勇氣

ぎし……ぎし……

規則正しく響くその音に、アランは目を覚ました。

固い寝台に横になっていると、身体がゆっくりと上下に動いているのを感じる。揺りかごのように心地よいその揺れからアランは身体を起こした。

利発で優しそうな瞳が印象的な少年である。滑らかな肌は健康的に日焼けし、儂さよりはたくましさが目を引き。

アランは枕元に置いた帽子を手にとった。ざんばらで伸び放題の黒髪を、青い布を巻いて作った簡素な帽子で包み込んだ。

寝台の縁に腰掛けたとき、部屋の中心で読み物をしていた男が振り返った。

「おお、起きたか。アラン」

「お父さん」

口元に蓄えた髭も凜々しいこの男はパパスといった。アラン自慢の父親である。

「う……ん」と伸びをしてから、アラン少年は父の元へと駆け寄った。

まだたったの六歳ではあるが、父に連れられいくつかの旅を経験したアランは、寝坊という言葉とは無縁の生活を送っていた。これも長旅で鍛えられた結果である。

机の縁に顎を寄せ、しばらく父の横顔を眺めていたアランは、ふいに声をかけた。

「ねえお父さん」

「ん？」

「僕、ゆめを見たんだ。りっぱなお部屋で、お父さんがすごく格好いいマントをしているの。おうさまなんだって」

「王様？ はっはっは。アラン、どうやらまだ寝ぼけているようだ

な

嘘じゃないのにな、とアランは思ったが、それ以上何も言わなかった。ただ不満そうに頬を膨らませるだけである。

その様子を見たパパスは苦笑を浮かべながら、読んでいた分厚い書物を閉じた。アランは以前、興味本意でその中身を見てみたが、長い文章どころか文字も読めないアラン少年はすぐに頁をめくるのを諦めた。それ以降、父の本にはあまり触らないようにしている。

「もうすぐ港に到着する。それまで外で遊んでなさい。潮風に当たれば眠気も覚めるだろう」

「うん」

「だがあまり走り回るんじゃないぞ。甲板にいる人々の迷惑にならないようにな」

「はい」

アランは駆け出し、すぐに何かを思い出して引き返す。部屋の隅に設えられたタンスから、薄紙に包んだ薬草を取り出す。

「これがあれば怪我をしてもだいじょうぶだよね？」

微笑むパパスに、アランは薬草を片手に元気よく言った。

「それじゃ、行ってきます！」

階段を上がり、扉をくぐる。

途端に頬を撫でる冷たい風に、アランは思わず眼を細めた。

澄み渡る蒼い空。

天高くどこまでも盛り上がる雲。

風を受けゆつたりと飛ぶ鳥たち。

そして空よりもさらに深く濃い青に染まった大海原。

アランは巨大な船の上にあった。

数日前、アランたちはパパスの顔なじみの船長と偶然再会し、どこかのお金持ちが所有するこの船に便乗させてもらったのだ。目指すはサンタローズという村である。かつてパパスとアランが住んでいた長閑で平和な村だ。

そこはアランの記憶に残っている最初の故郷である。  
サントローズに帰れると思うと、自然と気持ちが高揚した。

陽光のまぶしさに目を細めながら、アランは口笛をくちずさむ。  
波に揺れる甲板上也何のその、軽やかな足取りで目当ての場所へと  
歩いて行く。やがて甲板の幅はぐっと狭くなり、揺れも大きくなっ  
た。船首の部分だ。

帽子と同じ青色の、粗末な布の服を海風にはためかせながら、ア  
ランは鋭く突き出た舳先部分へと進む。下を見れば目もくらむよう  
な高さだが、アランは取り立てて恐怖を感じた様子もなく、「うわ  
あ！」と感嘆の声を上げた。

海。空。水平線だ。

世界はどこまでも広い。

いつか自分が大きくなったら、父とともに世界中を旅して回りた  
い。それが幼いアランの大きな夢であった。

「おおいつ！ 坊主、危ないぞ！ 戻ってこい！」

ふと背後から船員の呼ぶ声があった。気がつくとも舳先はかなり先  
の方まで進んでいたようだ。慌てて戻り、船員の前に立つ。全身真っ  
黒に日焼けした船員の男は大げさなため息をついた。

「ああびつくりした。まったく、坊主の身に何かあったら俺が船長  
にどやされるんだぜ？」

「ごめんなさい」

アランは素直に頭を下げた。船員は怒ったような、困ったような  
表情を浮かべていたが、やおら豪快に笑い始めた。

「ま、危ない危なくないは抜きにしてだ。坊主、お前よくあそこま  
で行けたな？ 怖くなかったのか？」

「ううん。とっても楽しかったよ。海って、すごく広いだね」

「そうかそうか。さすがパパスの旦那の息子さんだ。勇気がある」

ばんばんばん、と頭を叩かれる。おそらく本人は撫でているつも  
りなのだろうが、アランとしてはたまったものではない。小さく「  
おじさん……いたい」とつぶやく。

だが船員の男は気にした風もなく、嬉しそうに語り始めた。

「いいか坊主。坊主が立つてた舳先の部分はな、俺たちの船乗りの中じゃ『勇気を試す場』になっているのさ。新米のヒヨッコどもは、まず大抵あそこに立つと怖じ気づく」

「え？ ふなのりさんなのにな？」

「そうさ。坊主は勇気がある。新米ヒヨッコの半分も生きちゃいなにもかかわらずだ。きっと大人になったらどえらいことをやってのけるぞ、坊主！」

「どえらいことって？」

「どえらいことは、その……どえらいことだよ。ま、まあそのうちわかるって」

ばんばんばん、と相変わらず容赦なく叩かれる。それが親愛の表れだと子どもながらに察したアランは、目の端に小さく涙を浮かべながらも笑顔でうなずいていた。

### 3・小さな出逢い

その後、アランは船の中を探検した。乗船してから数日、すでに何度も船内は見回っていたが、何度見ても面白い。

例えば風に揺れる帆の様子とか。

床一杯に敷き詰められた荷物の山とか。

何故か風呂場で自分を驚かそうとしてくる変なおじさんとか。

逢う人逢う人、みな笑顔で迎えてくれる。そして誰もが、アランの父パスはすごい人だと言ってくれるのだ。アランにはそれが何より楽しく、そして誇らしかった。

だが、その楽しい旅もそろそろ終わりの時を迎えようとしている。水平線ばかりだった海に、うつすらと陸地の影が見え始めたのだ。「港が見えたぞー！」

マストの先に作られた見張り台で、船員が大声を上げる。にわか慌ただしくなる船上の直中に立ちながら、アランは興奮と寂しさを同時に感じていた。

「そろそろお別れだな、坊や」

声をかけられ振り返る。真っ白な服を着た初老の男性が微笑んでいた。航海中、よくパパスと話をしていた船長だ。アランもずいぶんと可愛がってもらった。まるで実の息子のように。

わずかにうなだれるアランの頭を撫でながら、船長は言う。

「さ……お父さんと呼んできてくれないか。もうすぐ港に着く」

「うん」

小さくうなずいたアランは駆け出した。客室にいる父を呼びに行く。

アランから港到着の報を受けたパパスは感慨深そうにうなずいた。「サンタローズを出てもう二年になるか。早いものだな。まだお前が四つのおきだから、覚えていないかも知れないが」

「うっん。僕の故郷だよ、お父さん。覚えてるよ」

「そうか。では、行くとしよう。忘れ物がないようにな」

そう言うとパパスは部屋を出て行く。父に連れ立って扉をくぐったアランは、ふと背後を振り返った。誰もいなくなった部屋に向かって深くおじぎをする。

「お世話になりました。行ってきます」

辿り着いたのは、巨大な船体には少々似つかわしくない小さな港だった。

操舵手の妙技でぴつたりと横付けされ、棧橋の代わりに大きな板が船との間にかけられる。アランは父と並んで、その作業を感心しながら眺めていた。

そのとき、港に人影があることに気付いた。三人。

「ルドマンさん！ お待たせしました！」

「ご苦労、船長さん！ 相変わらず時間どおりで感心ですな！」

船長と気安げに会話する港の人物。遠目でも恰幅が良さがわかった。傍らには小さな女の子がふたり、寄り添っていた。

ルドマンと呼ばれた男が棧橋代わりの板に足をかける。同時に、右側にいた女の子がルドマンを追い抜いて船に駆け込んできた。黒髪が海と空の蒼に映える。あっという間にパパスの前まで辿り着く。

きよとんとするパパスに向かって、黒髪の女の子は気の強そうな瞳を向けた。

「おっさん。邪魔よ」

「お、おっさ……？」

思わぬ台詞にパパスが目を白黒させる。次いで女の子はアランにも目を向けた。ほとんど睨むような表情ながら、そこに潜む可憐な容貌にアランはどきりとした。

「こらデボラ！ 待ちなさい」

「ふんっだ」

ルドマンの声にも振り返らず、デボラと呼ばれた少女はさらに奥へと駆けていった。彼女が向かったのはアランが唯一、立ち入ることが許されなかった専用の客室がある場所だった。

ルドマンがようやく板を渡りきる。傍らにはもう一人の女の子がいた。

アランはまたも、どきりとする。

大きなリボンと空のような蒼い髪が印象的だった。デボラとは反対に、清楚な華を思わせる可愛らしい女の子である。

彼女はアランの視線に気付くと、わずかに身体をルドマンに寄せた後、はにかみながら頭を下げてきた。

ルドマンが恐縮の体でパパスに詫げる。

「申し訳ない、お客人。私の娘がとんだ粗相をしてしまいましたな……」

「いえ。お気になさらず。元気があるのは大変良いことです。……その子もあなたの？」

「ええ。フローラと言います。私はこの子らの父、ルドマンと申します。さ、ご挨拶なさい。フローラ」

「はい、お父様。……初めまして。フローラと言います。さきほどはねえさ……姉が失礼をしました」

「これは驚いた。ずいぶんしっかりしたお嬢さんだ。……つと、失礼。挨拶が遅れましたな。私はサンタローズのパパス。こちらは私の子、アランです」

「は、はじめまして……」

突然名前を呼ばれ、アランはどきどきしながら礼をした。何だか格好悪いなと思いつつながら、ゆっくりと顔を上げる。

ルドマンは「利発そうなご子息ですな」と朗らかに笑い、フローラは先ほどよりも打ち解けた笑顔を見せてくれた。アランは再び顔を赤くしてうつむいた。

それからパパスとアランは船長に感謝の礼を言い、併せてルドマンたちの船旅の安全を祈った。彼らもまた、パパスたちの行く末に

幸多きことをと祈ってくれた。

船はゆっくりと出航していく。その後ろ姿を見つめながら、アランはふと、偶然出逢った二人の少女の顔を思い出すのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7449x/>

---

ドラゴンクエスト? ~天空の花嫁~

2011年10月21日06時58分発行